

浄瑠璃詞章の一考察

坂口, 至
宮崎大学講師

<https://doi.org/10.15017/10506>

出版情報 : 文献探究. 10, pp.29-35, 1982-09-15. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

浄瑠璃詞章の一考察

一 はじめに

近松の二十四編を中心とした元禄享保期の世話浄瑠璃の詞章は、近世前期上方口語の有力資料として、これまでしばしば利用されてきている。しかし、従来その口語性が強調されるあまり、浄瑠璃詞章が持つ音曲的側面、すなわちへ節づけも前提とした韻律的な文章という観点は、ほとんど閑却に付されているかのごとくである。

小稿ではとりあえず、みまの観点が浄瑠璃詞章の分析に有効性をもつことを、丁寧の意をあらわす助動詞「マスル」「マス」両形のあらわれがたいよって証することとし、詳細については他日を期したいとおもう。

二 問題のありか

近世における丁寧の助動詞「マス」は、よく知られているように、命令形に「マセ」とともに「ママイ」のどちらをあわせもつこと、終止連体形において「マスル」の勢力が比較的つよいことが今日のすがたとなつてゐる。その資料的実態については、宮地幸一氏の一連の御論考にくわしい⁽¹⁾。いま、用例数の関係等から命令形につ

坂口 至

いはびとまずおくことにして、元禄享保期の終止連体形のあらわれがたを、宮地氏の御調査に若干の筆者の調査をくわえて一覽する。下記の表のとくである。⁽²⁾

表1

	シヤムル		マスル		マス		マスル	
	語形	例数	語形	例数	語形	例数	語形	例数
西鶴浮世草子		31		64		178		5.7
浮世草子(西鶴以外)		30		30		377		5.9
近松歌舞伎脚本		56		160		389		5.3
歌舞伎脚本(近松以外)		109		117		117		6.9
笑話本		92		163		1.1		1.8
近松世話浄瑠璃		30		41		1.4		1.8
海首世話浄瑠璃								

この表から、

(1) いずれのシヤムルにおいても、「マスル」より「マス」の用例がおおい。

(2) 笑話本をのぞいて、浮世草子と歌舞伎脚本は共通に「マス」の用例が「マスル」の用例を左倒している。

(3) 浄瑠璃の場合は、浮世草子や歌舞伎脚本にくらべて、「マスル」

の比率がはるかにたかい。
等の専実がよめとれるが、問題は

(a) 西鶴浮世草子の詞章より口語性がたかいかんがえられている
世話浄瑠璃の詞章の方に、旧来の「マスル」の方がたかい比率であ
らわれているのはなぜか

(b) おなじ近松の作品でありながら、歌舞伎脚本と世話浄瑠璃で「
マスル」「マス」のあらわれがたに、おおきなへたたりがあるのは
なぜか

(c) 近松世話浄瑠璃と海音世話浄瑠璃における「マスル」「マス」
の比率がちがいはなぜか

の三点である。とくに (a)、(b) は納得のゆく説明のほしいところであ
るが、宮地氏はこれらの点には特にふれておられないようである。
このことは、当然「マスル」と「マス」が何らかの原理によつて
使い分けられているのかわからないのが、使い分けられているとすれ
ば、それはどのような原理によるのかという問題と関連してくるの
であるが、この点についても、宮地氏は「マスル」のもつ語調のつ
よさ、あらたまった感じということと考えておられ、何らかの客観
的な使い分け原理は想定されてはいない。

表2

町	武	女	男	位相 相形
93	9	37	55	マスル マス
152	11	85	78	マス

表3

町	武	女	男	位相 相形
30		14	16	マスル マス
39	2	18	23	マス

(海音)

使い分けはなにかの点とくである。

しかし、当期の浄瑠璃詞章にかまつては、ハ「マスル」「マス」
は、詞章の韻律性を満足するからで、あいおきなうようにもち
いられているのではないかと、まったくあたらしい視点を導入
することで、前記(a)(c)の疑問は一挙に氷解するものとかんがえら
れる。以下、近松と海音の作品によつて、このことを実証してみよ
う。

三 韻律からみた近松世話浄瑠璃の「マスル」「マス」

近松の浄瑠璃作品が、韻律——この場合、いうまでもなく音数律——
をふくんだ詞章をもっていること、特に、いわゆる「道行文」では、
七五の韻律性が顕著であることはよく知られている。

ここでは、そのくわしい具体相にまでふれる余裕がないので、別の
機会にゆずるとして、丁寧の助動詞「マスル」「マス」をふくむフ
レーズを、韻律の観点から整理してしめすと、表4のとくである。
なお、底本には、近松世話物全集、全三巻(藤井乙男校註、富山房)
ももちいたが、部分的に他の資料によつたところがある。

この表を、例文をもつて説明しよう。

(「マスル」前・セ・オ・オ・キ・地合)

ウ 只かみさまの／お情を／頼みますると／計にて (今宮、中274)
これは、表の一番みまの形式の例である。／は音数律のまれ
めをあらわす。このおおきなフレーズでは、七五七五のきれいな音

表4

マ		ス						マ					ス		ル		語形位置																			
単	後						前						単	後				前	拍数																	
五	五	六			六	七		八		五	四	五	六		七	拍形式																				
0 2 * /	0 3 * /	0 2 * /	0 3 * /	0 2 * /	0 3 * /	0 4 * /	2 2 * /	3 1 * /	0 3 * /	0 3 * /	2 2 * /	3 2 * /	2 2 * /	2 3 * /	4 2 * /	0 2 * /	0 1 * /	0 1 * /	0 2 * /	0 1 * /	0 2 * /	0 3 * /	0 3 * /	1 /	2 /	1 /	3 /	3 /	4 /	20 /	2 /	5 /	12 /	2 /	5 /	14 /
1	1	2	3	7	1	2	20	6	1	1	1	2	1	4	3	1	1	2	3	5	8	4	33	1	2	10	14									
2	3	24	7	1	2	20	6	1	1	1	2	1	4	3	1	1	2	3	5	8	4	33	1	2	10	14										

へ保留マール地合11詞6
マス地合6詞12
35

列せしめしている。「前」は、この場合「マール」が、七五を基本とする韻律の前の七に相当する位置にあらわれていることを、「マ」は「マール」をふくむひとつづきの音拍数をあらわしている。
また、「03*1」は「マール」をふくむ七拍をさうら説明する。「1」は「マール」に下接する助詞のたぐいの拍数で、この場合は助詞「と」をあらわす。「*」は「マール」または「マス」自体で、この場合は勿論「マール」をしめす。つきの「3」は「マール」に上接する動詞（あるいはこれに助動詞がくわわつたもの）の連用形の拍数をしめす。この場合は「頼み」である。「0」は、動詞のさらに上部に位置する目的

語・補語等の形式の拍数である。この場合それが存在しないことをしめす。これがあるのは、たとえば「マス・前・七・22*1・地合」
・ぶをひかれても／奉公の／しなかへますと／いひければ、（薩摩上73）
の「しな（品）」の場合である。
つきに、「地合」について、周知のとく、浄瑠璃の詞章は、文章のうえからは地の文と会話文にわかれ、音曲の詞章としての分類では、おおきくわけると地合（地）と詞のふたつとなる。したがって、ある言語形式は、地の文かつ地合、地の文かつ詞、会話文かつ地合、会話文かつ詞の四種類のいづれかにふくまれるわけであるが、助動詞「マール」「マス」は、地の文にあらわれなから、地合と詞とに分類すればふたりなることになる。そして、地合は三味線の伴奏がはりなんらかのふしをつけてかたるものであるから、原則的に三味線がはらず人物の対話や独白を写実的にいふあらわす詞よりも、韻律性という点からみると、よりたか／＼とが予想される。二者を区別するゆえんである。
また、つきのような例、
「マスル・単・五・02*0・詞」
・ういかふ脈が／よふなつた／玉子を参る／しるしに／左の脈が／ふは／と／打まする、（今宮・中巻）
の「単」は、七五を中心とする音律のひかに単独の音拍があらわれることをしめす。ここでは、七五の「左の脈がふは／と」のつぎ

の「打まする」の五音がそれである。このあとまた、七五の音律がつかうのである。

なお、へ保留にいられてあるフレーズは、たとえば

・一度がぢやうおさん様につけてとこもかしこも紫色に成程つめら
 せます。(昔肩 中511・詞)

・詞親仁ねてかおもしろいなんほかくしても慥な事聞てのます。(宵寒、下441・詞)

のようは、音教律のきれめが判然とないものをしめてしている。

さて、この表4から「マスル」と「マスレ」の語形は、七五を中心とする韻律をととのえるはたつきもなつて、あつちまなうかたちでもちいられていることが明白であろう。このなかで、例外になるのは

「マスル・後・六・〇〇・〇・〇」

「マスル・後・六・〇・〇・二・〇・〇」

「マスル・後・六・〇・〇・一・〇・二」

「マスル・前・六・〇・〇・〇・〇・一」

の四種類の、あわせて4例のみである。その他は、「マスル」と「マスレ」をいれかえてしまえば、すべて七五の韻律からとのおさかるのである。

以上を、さらにわかりやすくするために、表にまとめてみよう(表5)。

判定とある「適」は音教律をより満足するもの、「否」はその逆のものあらわす。へ保留の用例もこのさいに20例のうち、「適」

表5

判定		語形		前		後		単		合計		割合		詞	
否	適	マス	マスレ	マス	マスレ	マス	マスレ	マス	マスレ	マス	マスレ	マス	マスレ	マス	マスレ
1				14	14					14	206				
	13			125	45			5	3	8	129				
										6	77				

みると、割合では「否」が6%弱、詞では「否」が8%強で、幾分詞における例外の率がたかく、まえに予想した割合と詞の韻律性の相違に合致することくであるが、この場合その差はさほどいちじるしくないのである。

四 海音の場合

紀海音は、近松よりややおくれて世話浄瑠璃をかまはしめたが、その芸術性はともかくとして、興行的には近松の作品をうまわる成功をえたともあるくらい、当時近松に対抗した唯一の存在であった。そのかれが、浄瑠璃の詞章をこのようにかんがえていたかは、興味ぶかい問題であるが、当面の韻律の視点からすると「マスル」「マスレ」のあらわれかたを、近松とおなじ方法で表にしてみよう(表6、表7)。

なお、(原本には)紀海音全集の全八巻(清文堂出版)をもちいることにした。

は206例で、94%弱を占める。へ保留をふくめても全例中80%は「適」であり、これが偶然の結果でないことはあきらかである。

表6

マ		ス		マ		ス		ル		語形
後		前		後		前		後		位置
四	五	六		七		八	四	五	七	拍数
0 2 *	0 2 *	0 3 *	0 2 *	0 3 *	0 4 *	0 2 *	0 3 *	0 4 *	2 3 *	拍形式
0	1	0	2	1	0	3	1	0	0	地合
	9	6	1			1	1	1	4	詞
1	2	11	1	2	1				12	合計
1	11	17	2	2	1	1	1	1	4	

（保留）マス 地合 / 詞 / 2

五 まとめとつけたし

近松・海音の世詠浄瑠璃詞章における「マスル」と「マスレ」の使い分けが、ともに韻律によるものであることが、以上で実証できた。おもに、はじめに提出した問題の解をいめしておう。

(a)の解 西鶴の浮世草子における「マスル」「マスレ」のあらわれ

表7

否		適		判定
マス	マシ	マス	マシ	語形
		5	5	前
1		33	25	後
				単
		68		合計
		37		地合
1		31		詞

このふたつの表により、海音の場合は、近松にもまして詞章の韻律性を重視していたことが明白である。例外はわずかに例「適」の比率98%強という数字がこれらものかたる。なお、地合と詞の相違もなによりよい。

かたは、他の浮世草子や歌舞伎脚本同様、その当時の口語の実態によりちがいのとくかんがえるべきである。それに対して、世詠浄瑠璃の場合は、「マスル」「マスレ」のあらわれがたがまったく別の原理にもとづくため、このような差がたがたである。世詠浄瑠璃の「マスル」の比率がたがたにいついては、(c)の解を参照。

(b)の解 (a)の解とおなじことになる。

(c)の解 近松世詠浄瑠璃と海音世詠浄瑠璃の「マスル」「マスレ」の用法が、おなじ原理にもとづくためである。ついでに、「マスレ」の用例が「マスル」の用例よりもおおく、しかし数倍とまではいかぬ理由もかんがえてみよう。表4と表7をいま一度みなおすと、「マスル」「マスレ」の用例は、七五を中心とする韻律の後部、すなわち五音を中心とする部分におおくあらわれていることがわかる。また、「マスル」「マスレ」に上接する動詞などの連用形は、二拍と三拍のものが多い。そして、後部の五音を中心とする部分は、「マスル」「マスレ」のいきり（終止）の場合のほかは、一拍の助詞（「と」がおおい）などを用いることがえることもすくなくない。この三つをあわせかんがえると、前記の理由を説明できるであろう（近松の方が「マスレ」の勢力がよりつよいのは、いきりの場合、上接する動詞などに三拍のものが二拍のものよりはるかにおおくあらわれているからであろう）。

最後に、近松や海音が「マスル」と「マスレ」の音拍数の相違を積極的に利用して韻律をととのえたことの意味を、浄瑠璃詞章と韻律

の問題の今後のみとおしについてふめて、この稿をせたい。
まず前者について、これに関連して想起されるのは、近松自身の
つまのうな発言である。

文句にては多ければ、何となく賤いもの也。然るに無功な
る作者は文句をかならず和哥或は俳諧などのことと心得て、五字
六字等の字くほりも合さんとする故、おのづと無用のてには多く
ひる也。たとへば、年もゆかぬ娘をといふべきを、年はもゆかぬ
娘をほといふこととくはなる事、字わりにかはうよりおこりて、
自然と詞づらいやしく聞ゆ。されば、大やうは文句の長短を揃て
書へき事なれども、淨るりはもと音曲なれば、語る処の長短は節
にあり。然るを作者より字くほりをまつしりと語過れば、かへつ
て口にかうらぬ事有物也。この故に我作には以かうほりなき故
てにはあつからずな⁽⁸⁾。

この言説では、一単語でふたつの語形をもつ「マスル」「マスレ」の
ような場合も、近松がどのようなにかんがえていたかは、直接にはわ
からないが、「五字七字等の字くほりを合」させている以上、それが
不自然な（つまり「詞づらいやしく聞ゆ」）つかいかたでなかつ
たことはうかかえより。換言すれば、「マスル」は口頭語の世界で
は「マスレ」にくらべて劣勢ではあったが、多用することにはほぼ抵
抗を感じない底のものであったといえようか。

後者については、「マスル」と「マスレ」のように、意味内容がお
なじかまたは近似していながら、その音拍数などに異なる言語形式
たとえば、仮定条件をあらわす「ならば」と「ならは」、「たらは」

と「たらし」、あるいは逆接の接続助詞「ともし」と「ともしなむか」、「
マスル」「マスレ」とおなじようなつかわれかたをもっているのかと
かといふことを、追跡してみる必要があるだろう。資料としては、
海音の世話津瑠璃が注目される。「マスル」「マスレ」のデータから
して、海音の世話津瑠璃は韻律に関してかなり敏感であることが予
想されるが、もしやうであれば、海音の言語意識をさぐる有力な準
尺となるかも知れない。また、近松の場合も、韻律による言語操作
がどの程度までおよんでいるのか、口語性からみて、興味のある
ところである。

【注】

(一) 宮地幸一「マまする」から「まする」への漸移相

① 津瑠璃詞章の考察(一)、(二) (学芸国語国文学六、七)

② 脚本詞章の考察、天祿歌舞伎傑作集(関東学院女子
短大論叢四五)

③ 浮世草子詞章の考察(一) (東京学芸大
学紀要二四)

④ 笑話・小吐・黄表紙詞章の考察(一) (国
学院雑誌七ハロー)

なお、これらの論考は、近時「ます源流考」(桜楓社)にまと
められた。

(二) 調査資料はつまのこととくである。

「西鶴浮世草子」の好色一代男¹⁶⁸²、西鶴名残の友¹⁶⁹⁷、二四種

「浮世草子(西鶴以外)」の好色万金丹¹⁶⁹⁴と千代袖算盤¹⁷²²、二

- 三種 「近松歌麿伎脚本」(大名はくさみ曾我⁶⁸、百夜小町夕霧七年忌⁶⁸、水木辰之助饒振舞⁶⁹、仏母摩耶山開帳⁶⁹、けいせいの仙の原⁶⁹、傾城全生大念仏⁷⁰、六種「歌舞伎脚本(近松以外)」(好色伝受⁶⁹、傾城浅間獄⁶⁹、傾城暎の鐘⁷⁰、三種「笑話本」(軽口御前男⁷⁰、軽口唇合刀⁷⁰、軽口あられ酒⁷⁰、露休置土産⁷⁰、軽口都男⁷¹、新話笑眉⁷¹、軽口星鉄炮⁷¹、軽口福蔵主⁷¹、軽口出宝台⁷¹、九種「近松世話浄瑠璃」(曾根崎の山⁷¹、心中宵庚申⁷²、二四種「海音世話浄瑠璃」(桃久未松山⁷¹、袂の白しほり⁷¹、なんぼ橋心中⁷¹、今宮心中九腰連理松⁷¹、傾城三度笠⁷¹、八百やお七⁷¹、二十五年忌⁷¹、心中ニッ腹帯⁷²、八種
- なお、浮世草子の個々の作品については、宮地氏の①の論考も参照されたい。また、表の用例教には、「マスマ」をふくめていないことを付記しておく。
- (3) 歌舞伎脚本に近松自身のこととはかほどの程度反映されているのか問題がなげかけではないが。
- (4) 注(一)の①の論文、一七〇。
- (5) こととは、底本「⁷¹」を頼やすくと立すらす(文殺、下州)は、古典全集本、角川文庫本(いすれも八行本)では、「頼ます」と立すらすと成っており、ミラウを採用了。
- (6) このあたり、「日本の古典芝居」浄瑠璃(平凡社)290ページ以下、あるいは「日本古典文学全集 浄瑠璃集」(小学館)の解説等も参照のこと。

(7) 一般に、海音の世話浄瑠璃は十編存在するとされているが、全集では、傾城思科屋⁷¹を存疑作とし、また、梅田心中⁷²頃は明治以降の翻刻本によっているので、この二作も考察の対象から除外した。

(8) 穂積以貫著「難波土産」所載。引用は、「日本古典文学大系 近松浄瑠璃集下」による。

— 宮崎大学講師 —